

再生

師友道友の活動を綴る善行拾徳誌

人間は、腰骨をまてることによつて自己分裂を防ぎうる。

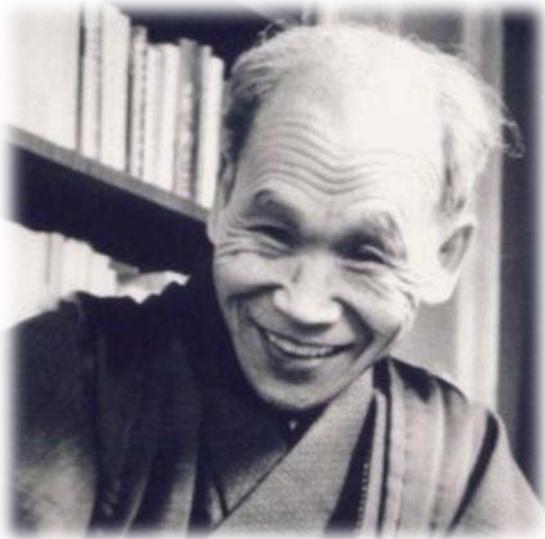
第0114号

2026.2月号

NPO法人福岡実践人

人間もつねに腰骨を立てていると、自分の能力の限界がわかるようになる。随つて無理な計画はしなくなる。私が今日まで大たい計画の果遂ができたのも、その根本はこの点にある。

森信三先生一語千鈞より



再生の題字（森畑彦様提供）は、森信三先生の直筆です。

一日は一生の縮図なり

仁

令和八年

日本の父へ

グスタフ・フォス 著

1父ありき—私は父からこう学んだ

スパルタでも放任でもなく

—先生は戦前、ドイツで教育をおうけになったのですから、きっと、厳しいスパルタ式教育をおうけになったのでしょね……。

私は幾度も、このような質問をうけた。現代はレッテル貼りの時代ではあるが、私は自分のうけた教育に対して、厳しいとか甘いとか、あるいはスパルタ式だとかいうようなレッテルを貼りたくない。私の両親も、自分たちが厳しいか厳しくないか、そんなことは全く考えなかったと思う。また、教育学や心理学、家庭教育の手引なども、もちろん読まなかった。そのような教育ママ用の読み物に惑わされることなく、常識で私を育ててくれたのである。

よく耳にすることであるが、最近の若者には昔ほどしつけが行き届いていないと言われている。そして、その責任は社会のだらしなさ、あるいは学校教育の怠慢にあると非難するのである。しつけのない原因を社会に押しつけるのは、自分に逃げ道を準備する卑怯なやり方だし、しつけを学校に期待するのは、非現実的な虫のいい話である。親として、家庭で行なうべきしつけまで他人に任せてしまうのは、それこそ非両親的なことである。しつけを学校に委ねたいということの動機の一つには、しつけ教育に当然なくてはならぬ厳しさを免れたいという考えがある。よきパパ、よきママというイメージをなんとかして維持したいと願う気持ちもあるだろうし、子供をきつく注意することによって、親子の間に溝ができるのではないかと不安もあるだろう。どんな理由があるにせよ、家庭のしつけになくてはならぬ厳しさを避け、憎まれ役から逃れようとする傾向が世の親のなかに強まっている。

これは、実に危険なことである。昨今では、さらに無責任な傾向が生じている。学校の先生がしかるべき指導をやろうと思っても、できない場合が多くなってきた。生徒を強く叱ったりすると、必ずといってよいほど、ある決まったタイプの親から文句が出るので、先生の方は萎縮してしまっ、なにもできなくなっている。こんなことになるのも、生徒の背後にいる親がしつけを先生に委ねながらも、しつけに不可欠の厳しさに全く盲目になっっているからなのであって、先生の手を縛ると同時に、結果的に子供をひどくスポイルすることになるのである。このことはともかくとして、忘れてならぬことは、子供を叱るのは先生の仕事であるよりも、むしろ親

実践人福岡仁風読書会 第一一四回 1月3日

場所:仁風庵

(実践人の家の会員であればどなたでも参加できます。)

(参加費無料) 詳細は、世話人へお問い合わせください。

のやるべき務めだということである。

子供をしつける方法にはいろいろあるが、そのなかで、親にしかできない罰がある。たとえば、外出を禁ずる、小遣いを減らす、好きな娯楽を止めさせる、嫌いな仕事をやらせる、おどかして従わせる、時には叩く——こういうことは親にしかできないことである。そして、このような罰は不要であるとか、してはならないという考えこそ、子供の心にとんでもない甘えを生じさせてしまうのである。

こうした罰を与えることは、スパルタ式と思われるかもしれないが、実はまるで違う。自分の愛する子供の教育に関して、親の持つ決定的な切札なのである。子供の個性を見きわめ、そして不従順、または違反の程度や性質を考えたうえで、適切な方法で子供に反省を促すことは、親に任せられた務めなのである。

ある夕方、私は母とひどい口喧嘩をしてしまった。命ぜられた仕事をやりたくなかったからである。私は癩癩を起こし、大声をあげて母に悪口を浴びせてしまった。すぐに父がとび出して来て、私の腕をつかまえ、強い声で、

「口をしめろ。自分の部屋へ行け! いますぐだ」と言った。

私が母に言った悪口は、たしかに言い過ぎであった。いくら詫びても、それだけではすまされないと覚悟していたが、やがて、なんにもなかったように夕食に呼ばれた。もちろん、食事の話はよそよそしいもので、私は砂を噛む思いで食事をすますと、そそくさと自分の部屋に戻ろうとした。そのとき、驚いたことに、父から、

「散歩に行かないか」と、誘われたのである。

私は初めは、先刻のことですつと叱られるかと、重い足をひきずっていた。しかし、近くのモミの疎林を歩いていくうちに、いつの間にか、父のおかしい世間話にのせられてしまい、身も心も軽やかになってしまった。私たちは夕日に輝くモミの梢を見上げたり、ねぐらに帰る小鳥の声にあわせて口笛を吹いたりして歩いた。重苦しい心のわだかまりは消えてしまっていた。

散歩が終って玄関に入る時、父は手を私の頭において言った。

「さっきのことだが、お父さんは本当に残念だった。おまえがあんなひどい言い方をするとは思わなかった。二度としてはいけないぞ、特にお母さんに対しては。絶対になあ。本当の男のやることじゃない、全く」

父はやさしく微笑していたが、その目は、じっと私を見つめていた。

「お父さんは、お母さんともう十五年も一緒に暮らしてきたが、お母さんに向かって怒鳴ったりしたことはない。失敬なことを言った覚えもない。おまえは一度でも、お父さんの口からそのようなことを聞いたことがあるか？」

私は首を振った。すると、本当に悪いことをしてしまったという思いとともに、涙がこみあげてきた。

「癩癩は抑えるものだ。反抗にも限度がある。特にお母さんに対しては、たとえどんな理由があっても、あんな振舞いをしてはならない」

今でも、その時の父の声が耳の底から響いてくる。おやじは本当に悲しんでいたのだとしみじみ感じたものであった。

「鞭の音、心に響く」という諺がある。この諺が貴重な教育経験に即していることは、私自身の体験からでも証言できる。しかし、父のその日の戒めは、鞭よりも強く私の心を打ったのである。「私を鏡にせよ」と言うことができる父親の信念は、子供の心に深く永く生き続けるものなのである。

「先生、子供のお尻くらい叩いてもかまいませんか」と、しばしば質問される。このことについて、父親としてまた先生として教育に長い経験のある人が次のように答えた。

「神様は、せっかく訓育の丘、すなわち、お尻をおつくりになったのですから、遠慮はいらないでしょう」

その通りだと思う。また、私たちが毎日使っている漢字の中に、おもしろい歴史を見出すことができる。たとえば、「教」という字の昔の形は、当時の東洋人の教育観が前に述べた考え方とたいして違わないことを示している。周知のように、古い「教」という文字の偏は聖賢の道に従いならわされることを示し、旁の方は鞭を加えることをあらわしているのである。

しかし、鞭というものは、たとえそれが愛の鞭であっても、惜しんで使うべきものである。どんな罰を与えるにしても、その罰は親の怒りはけ口、あるいは興奮している心の鎮静剤であってはならない。「愛の鞭」が「愛の無知」にならないように。罰の狙いは、あくまでも、悪かったことを理解させ、悪への心の傾きを正し、心に反省を促すことではなくてはいけない。そのうえに、悪かったことに対して責任をとる心構え、そして償いをする正義感を子供の心に植えつけることができるなら

ば、罰を与えることは、社会性のある人格へのすばらしい踏み台となるのである。

子供を叱ると、親と子の間の親密感が薄れてしまうという心配が、最近、親を思い誤らせている。それは迷信にすぎない。このことを、私は、若い頃、身をもって体験した。

叱られたあと、私の心が再び青空のようにすがすがしくなったときに、「どうだ、わかったか？」

と、父によく訊かれたものだった。

「ええ、わかりました」

「お父さんの気持ちもわかったか？」

私は快活に答える。

「もちろんですよ」

父は、やつとにっこりして、

「それじゃ、トランプでもやろうか」

「うん。でもやつつけるよ。復讐戦だ」

「そのくらいの復讐なら……」

とうとう、二人は笑い出すのであった。母はいつも、男同士の独特の心の触れ合いに驚いていた。

このような親と子の間の心の触れ合いは、知らず知らずのうちに、子供の心の中に親の指導を受け入れようという姿勢を育てていくのである。

子供が「厳しいな」と思うときも、

誰しも覚えのあることであろうが、私も幼い頃、部屋を駆け廻り、ころんで泣くことがよくあった。あたりかまわず大声で泣き出すと、母は心配して抱き上げようとす。父は、「立て！泣くのはよせ！ころんだくらいでなんだ、めめしい！」と、怒鳴りつけるのであった。

叩かれたこともある。また、風邪をひいて微熱のあるとき、父は、「そのくらい、なんでもないじゃないか。いくじのない男は大嫌いだ」と言った。しかし、その夜になって、熱がないかと心配して私の寝室に入ってきて、手を私の額にのせたことを覚えている。

私の父には厳しすぎる面があったかも知れないが、私はその厳しさのなかに、いつでも父の愛情を感じとることができた。父は私を男にしたかったのだと思う。

父は幾度も、「男には弱さがあってはならない」と言った。男！この言葉は、私にいろいろの懐かしい思い出を喚び起こさせる。その一つは、私が中高校生時代によく歌った青少年団の歌である。父も一緒によく歌ってくれた歌でもある。

男は内に籠っているものではない。
外へ出て行くのだ、力瘤をつくりに。

冒険を愛し、

困難にぶつかって行くのだ。

雨にうたれ、風に吹かれても、

嵐に向かって立つのだ。

誇りをもって進むのだ。

強いもの、それは男だ。

昭和五十年（一九七五年）の夏、西ドイツへ行く機会があり、この歌を妹の三人の息子たちと歌うことができた。妹はしみじみと、子供たちこう語った。

「お兄さんとお父さんがよく歌った歌なのよ。子供の頃、二人が合唱しているのを聞くと、いつでも羨ましいと思ったの。男に生まれていたらなあって思ったわ。本当に懐かしい思い出ね」

時折考えることであるが、もし私の父が現代の父親たちに何か言うとしたら、次のようなことではないかと思う。

——遠くとも歩かせよ。雨が降っても迎えに行くな。電車では立たせよ。高い山に登らせよ。朝、子供を起こしてやるな。遠慮なく使いに出せ。子供の部屋の整理を手伝うな。仕事をやらせよ。仕事があれば捜させよ。……一言でいえば、「甘えん坊をつくるな」。

厳しいことであると思う人がいるかもしれない。しかし、男である父親は、男である息子を男らしい男に育てなくてはならない。男同士であるから、荒っぽい言葉遣いや、やり方があるのは当然である、母親は賛成しかねても。

つまり、父親の愛の構造は、母親のとはちがうのである。母親にとつては、子供が自分の膝元から離れるのを認めることはむずかしいことなのである。わが子をいつまでも無事に守っていききたいというのが、母親の愛である。父親は、わが子の心に自分自身を守ろうとする意欲や決断を呼び起こし、わが子が他人にも自分自身にも負けないように成長することを願う、さらに、「より強く、もっと強く」と、わが子を強い心を持つ男に育てていきたいと望む。これが、あらゆる弱さを憎む父親の、わが子に対する愛なのである。

このように考えると、最近よく言われている、子供の心の教育は第一に母親の役目であるということは、残念ながら大きな誤りであると言わざるを得ない。この誤った考えが、子供に甘えを植えつけているのだと思う。

大人の社会にみられる人間の弱点——わがまま、妬み、ずる賢さ、利己主義、残忍さなどは、みな、幼い子供の心に芽生えている。これらの人間の生まれつきのものである。そうした心の衝動をコントロールできないうちの子供は、当然、非人間的、非社会的な性格を帯びてしまうから、その子供には、コントロールする力を養わせなくてはならない。しかし、その衝動を抑えさせることだけでは充分ではない。大切なことは、その衝動に潜在しているエネルギーを上手にリードしながら、プラスに転化させることである。これが父親の役目なのである。男の子の場合は、特にそうである。

父親は、家庭の外の実社会を自分の身で体験している。父親は、その辛い体験を通して、人類の進歩、及び社会の発展は人間個人の進歩によつてのみ可能となることを知っている。そして、個人の進歩というものは、人間の心の向上以外にはあり得ない。これもまた、父親の個人として、社会人としての経験である。そのうえ、父親はもう一つの経験をしている。すなわち、心を清め、強め、高めることは、実に厳しい、絶え間のない涙ぐましい努力の賜物であるということである。私の父は、いつか次のように言ったことがある。

——聖書によると、天使さえも悪魔になった。人間はなおさら危ない存在である。悪魔にならないように、心にへばりついて心を窒息させてしまふたちの悪い垢は、削りとらなければならぬ。それをとりなさい。痛いけれどもな。

そして、父はにっこりして、つけくわえたものだった。
——お父さんにそれを削りとらせると、もっと痛いぞ。

いつの時代でも、子供の心の教育に必要なものは、父親の適度の制御である。しかし、今日の日本の家庭教育には、この是非とも必要なコントロールが欠けていると思う。「お母さん任せ主義」の今日の「民主主義パパ」のもとでは、子供は強く、たくましく育たないのである。

愛する子供の教育には、甘やかしがあつてはならない。それはちょうど偏食のように、ひ弱な子供をつくってしまうのである。それに、そうした子供を溺愛する親は、子供の精神的支えになることができないうちの子供から尊敬もされない。「溺愛」という言葉は、おもしろいことに、ドイツ語では「猿の愛」という言葉であらわしている。人間の子を猿の子にしてはならないからであろう。

教育には厳しさが必要なのである。厳しさは教育される者にとってだけではなく、むしろ、教育する者にとってなおいっそう必要なのである。親が子供に期待することと、自分が行なうこと——この言行の一致の厳しさをこそ、尊いものなのである。

「再生」一月号 グスタフ・フォス
「自立のしむけから」 をよんで けさえもん

この章では、筆者が父親から受けた「自立」を重んじる教育と、それが自身の人生観にどれほど大きな影響を与えたかが描かれている。父は経済的に決して余裕のある立場ではなかったが、息子の可能性を信じ、ギムナジウムへの挑戦を勧めた。しかしその一方で、学業そのものについて過度に干渉することはなく、「自力でやれ」という姿勢を一貫して貫いている。この態度は、子どもを突き放しているようでありながら、実は深い信頼と覚悟に裏打ちされた愛情であると感じた。

特に印象的なのは、父が成績について叱責せず、大学進学も強制しなかった点である。「勉強が足りないなら石炭を掘れ」という言葉は厳しいが、選択の責任を子ども自身に委ねる覚悟を示している。

このような環境の中で、筆者は親に甘えることなく、自分の進路や努力を自分の問題として受け止める姿勢を身につけていった。その結果、主体性や自主性が自然と育まれたのだと思う。

後半で語られる日本とドイツの親の教育観の違いも興味深い。日本では学歴社会や家の面目といった要素が、親の過干渉や子どもの甘えを生みやすいと筆者は指摘する。親が子どもの将来を思うあまり手を差し伸べずぎることで、かえって子どもが自分で考え、行動する機会を失ってしまうという問題提起には大きくうなずかされた。

この文章を通して、自立とは「放任」ではなく、「自分で選び、その結果を引き受けさせること」なのだと感じた。

父の「人間は誰でも自分の幸福の鍛冶屋である」という言葉は、現代にも通じる重みを持っている。子どもを信じ、甘えを許さず、自分の人生を自分で切り開かせる——その姿勢こそが、本当の意味での教育なのだと強く印象に残った。

「再生」二月号 グスタフ・フォス
「スパルタでも放任でもなく」 をよんで けさえもん

筆者は、自身が受けた教育を「スパルタ式」などの単純な言葉で片づけることを拒み、両親が常識と責任感をもって子育てをしてくれたことを強調する。特に印象的なのは、しつこく学校や社会のせいにする現代の親の姿勢に対する厳しい批判である。子供を叱ることから逃げ、「嫌われたくない」という親の都合が、結果として子供を甘やかし、社会性を育てる機会を奪っているという指摘は、現代にも通じる問題だと感じた。父親の役割についての考え方も、この文章の大きな柱である。筆者の父は、感情的に怒鳴り続けるのではなく、叱るべきところでは毅然と叱り、その後で対話や行動を通して反省を深めさせている。母への暴言を戒めた場面では、父自身が模範となる生き方を示し、「私を鏡にせよ」という無言の教えを与えていた。その厳しさは恐怖による支配ではなく、子供の心に深く残る愛情に裏打ちされたものであった。

また、罰についても、筆者は無条件に否定するのではなく、「怒りのはけ口」であってはならないという前提のもと、子供に責任感や正義感を育てるための手段として位置づけている点が印象的である。厳しさとは親自身が自制し、覚悟をもって行うものであり、決して楽なものではないという認識が一貫している。

さらに、父親と母親の愛のあり方の違いを明確に述べている点も特徴的である。母親の「守る愛」に対し、父親は「社会に送り出す愛」「強く生きる力を育てる愛」を担う存在として描かれている。子供の心にある衝動や弱さを抑えるだけでなく、それを正しい方向へ導くことこそが父親の重要な役割だという主張は、厳しいながらも説得力がある。

この文章を通して感じたのは、真の教育とは、甘やかしても放任でもなく、親自身が厳しさを引き受け、言行一致の姿勢を示すことによって初めて成り立つということである。子供を思うからこそ叱り、導き、手放す勇気を持つ——その覚悟こそが、筆者の言う「スパルタでも放任でもない」教育なのだと感じた。

第二章 掃除が会社を変える

こんなに「美しい会社」がある

私が「美しい会社」と思っている会社のひとつに、長野県の「伊那食品工業」があります。この会社は、国内の寒天製造で八〇パーセントのシェアを占める会社で「かんでんぱば」というブランドをもっています。それまで天候によって生産量と価格が大きく左右されてきた寒天を安定供給できる仕組みをつくり、成長してきた会社です。

そして、この会社のすばらしいところは、開発に多くの困難をきわめたはずの技術を、寒天市場全体の活性化をめざしてほかのメーカーに惜しげもなく提供したところにあります。

通常であれば、自分のところで多額の投資をした研究の成果を、よその会社に教えるということは考えられません。また、寒天のよさをもっと知ってもらえるようにと生まれたのが「かんでんぱば」ブランドです。今では寒天は、食物繊維の豊富な健康食品として注目を集め、医薬品の原材料など、新しい用途も広がっています。

そして、自社のまわりの赤松林の松を一本でも多く残そうという考えから、約三万坪の敷地をレストランやホールなどを備えた「かんでんぱばガーデン」として整え、地域の皆さんに美しい場所を提供、この場所は社員全員で毎朝掃除をされています。

私もその朝掃除を見学させていただきましたが、八時二十分の始業の三十分前には社員全員が会社に来て、皆さんがいきいきと掃除をしている姿は、とても美しいものでした。

伊那食品工業の会長である塚越寛さんは、「いい会社をつくりましょう」を社是として掲げ、社員をはじめ、会社をとりまくすべての人々が、日常



会話のなかで「いい会社だね」と言ってくれるような会社をめざしているそうです。

私が拝見する限り、この会社の皆さんが、地域のため、社員同士のために助け合ったり知恵を出し合ったりしている姿はとても純粋で輝いていました。私はこれぞまさに「いい会社」であり、「美しい会社」だと思ふのです。

鍵山相談役が実践されてきた「掃除道」は、単に環境をきれいにするための行為ではなく、人の心や生き方を磨くための道であると感じます。相談役は、誰もが敬遠しがちなトイレ掃除を率先して行い、その姿で周囲に影響を与えてきました。言葉で指示するのではなく、黙々と続ける姿そのものが、後に続く人の心を動かし、やがて会社や社会を変えていく力になるのだと思います。

その考え方は、伊那食品工業の姿にもはっきりと表れています。寒天メーカーとして高いシェアを誇りながら、自社の技術を独占せず、寒天市場全体の発展のために他社へ提供する姿勢は、利益だけを追求しない「いい会社」を目指す方々そのものです。また、地域の自然を守るために「かんでんぱばガーデン」を整備し、社員全員が毎朝掃除を行っている点にも、掃除を通じて人と環境を大切にしている心が根付いていることが感じられます。

伊那食品工業の社員が、始業前からいきいきと掃除に取り組む姿は、まさに相談役が示してきた「姿で示す経営」の実践例だといえます。掃除を通して、謙虚さや気づく力、仲間や地域への思いやりが育まれそれが「いい会社だね」と自然に言われる企業文化につながっているのだと思います。

鍵山相談役が経験されてきた姿から、後に続く者の一人として、より良い会社の姿を学び、ほんの少しでも良いから自分の生活に生かしていけたら良いと思います。身の回りを丁寧に整え、目の前の小さなことを大切にすると姿勢を持つことが、人としての成長につながる、やがて周囲に良い影響を与えていく。そのことを、掃除道と伊那食品工業の実践は教えてくれていると感じました。袈裟右衛門 拝

日本一きれいな博多駅・福岡の街に！

第 386 回

博多駅 早朝清掃

毎月 **8** 日 午前6時15分～

【第一回】平成5年12月8日開催

福岡実践人・JR九州博多駅
精華女子高等学校・福岡掃除に学ぶ会

 ハウスマイト



第386回 博多駅早朝清掃 令和8年賀正

1月8日(木曜日)

32名参加



博多駅早朝清掃は、今回で366回を迎えました。回を重ねる中で、多くの人が集い、活動が継続していること自体は大きな価値である一方、新代表のI/Jさんからは、近ごろの博多駅早朝清掃に対する「異変」についての問題提起がありました。

鍵山秀三郎相談役は、掃除を「形」ではなく「心」を磨く行いとして捉え、同じことを続けるからこそ、初心を忘れないことの大切さを説かれてきました。人は、同じ場に立ち、同じ行動を繰り返していると、知らず知らずのうちに慣れが生まれ、気づきや感謝の心が薄れてしまいます。掃除道が教えているのは、そうした慣れに流されず、常に原点に立ち返り、自分の姿勢を問い続けることなのだと思います。

今回の問題提起は、活動を否定するものではなく、むしろ「より良い場であり続けるため」の問いかけでした。一人の目立つ存在が牽引するのではなく、多くの人と同じ志のもとに集い、互いに共感し合いながら続けていくこと。それこそが、鍵山秀三郎相談役の掃除道の精神に通じる博多駅早朝清掃の在り方ではないでしょうか。掃除を通じて自分自身を見つめ直し、場の空気を整え、次に続く人のために姿を残していく。その積み重ねが、366回という数字以上の価値を生み、これからの博多駅早朝清掃をさらに深みのあるものにしていくと感じます。

けさえもん 拝



博多駅副駅長



新代表のU/Kさん挨拶



楽しく元気に！



いつも楽しい！って参加



2026.1. 18 於：太宰府観世音寺トイレ磨き

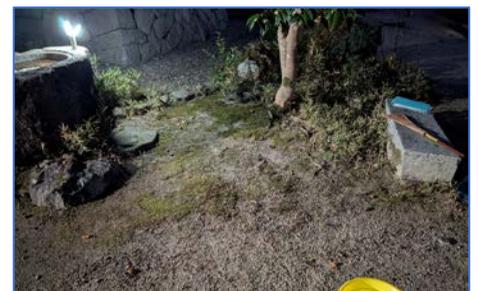


毎月、太宰府戒壇院作務に先立つ早朝五時から6時30分に、隣接する観世音寺駐車場のトイレ清掃を行っています。人の少ない早朝の静かな時間帯に、心を整えながら掃除に向き合う大切な実践です。本年11月、12月は、私自身が発案者でありながら県外でのお掃除道友との清掃遠征交流に参加していたため、現地の清掃に加わることができませんでした。しかしその間も、戒壇院作務に参加する道友の皆さんが少人数で清掃を継続してくださっていました。発案者が不在でも活動が途切れなかったことに、心より感謝するとともに、皆さんのお掃除に対する志の強さに深く感銘を受けました。これは、鍵山掃除道の教えである「凡事徹底」「気づいた人がやる」「継続の尊さ」が、形だけでなく心に根づいている証だと感じます。今後もこの実践を大切にしながら、掃除を通じて自らを磨き、場とご縁を清め続けていきたいと思ひます。 けさえもん 拝

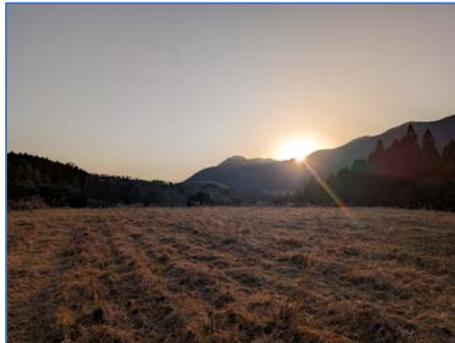
2026.1. 18 於：太宰府戒壇院作務



令和の始まりと同時に、戒壇院の住職と共に始めた「戒壇院作務に学ぶ会」は、今年で8年目を迎えます。毎回、勤めのない時には住職自ら率先して作務に参加してくださり、その姿勢が自然と場の空気をつくってきました。さらに数年前からは、禅寺である戒壇院の行事「坐禅会」に参加される方々も、特に指示されることなく掃除（作務）に加わるようになりました。誰かに命じられたからではなく、周囲の行動や環境に感化され、自ら進んで動き出す—このような「感化力」こそが、掃除を通して人が育ち、場が整っていく姿なのだと思います。まさにそれは、「掃除は人を育て、心を磨く」という鍵山掃除道の精神そのものであり、作務を通して学ぶ本質ではないでしょうか。 けさえもん 拝



2026.1.14 楽農人放浪記in熊本県阿蘇



楽農人の放浪記～阿蘇の原野にて～

鍵山秀三郎先生が、かつて袈裟右衛門の鹿児島圃場を訪ねてくださったことがある。その折に先生は、こんな言葉を残してくださった。

「あなたのやってこられたことは、私たちがお掃除をさせて頂いたことと同じことですよ」

あれからずいぶん時間は経ったが、その一言は、今も放浪の道中で、ふと背中を押してくれる。

袈裟右衛門は鹿児島生まれ、鹿児島育ちの百姓である。平成の初め頃から、耕作放棄地、とりわけ不在地主によって荒れた土地を見つけては、仮払い機とトラクターを持ち出し、手弁当で草を刈り、土を起こしてきた。誰に頼まれたわけでもない。ただ、荒れたままの土地を前にすると、通り過ぎることができなかった。それがいつしか仲間を呼び、NPO法人「楽農人」へとつながっていった。

楽農人の根底には、**二宮尊徳翁の言葉「農は国の本なり」**がある。日本の再生は、農業の再生からしかありえない――そう信じ、土地を耕すこと、草を刈ること、そして仲間と汗を流すことを、日々の暮らしと同じくらい大切にしているのだ。

今回の放浪先は、熊本県阿蘇。鍵山相談役の師友道友であるO/Sさんから声がかかり、圃場の草刈りを手伝うことになった。現地立つと、4,500坪という広大な原野がどんと目の前に広がる。ススキや萱は3メートル近くまで伸び、トラクターの屋根を軽々と越えている。正直なところ、これを見て「数日仕事だな」と思わなかった人はいなかっただろう。

だが、楽農人は違う。荒れた土地は、敵ではない。むしろ遊び相手だ。どう刈るか、どう攻めるか、どこから入るか。地形を読み、草の癖を見抜き、機械と相談しながら進めていく。苦労はあるが、苦行ではない。自然の中で身体を動かすこと自体が、もう楽しい。

「今日は日没までに終わらせよう」そう心に決め、早朝5時、福岡を出発。相棒の運搬車・ポンド号とともに阿蘇へ向かった。作業開始は7時40分。昼飯も忘れて草を刈り続け、15時にほんのひと息入れただけで、また原野に戻る。汗をかき、機械を鳴らし、時々笑いながら、ただ黙々と手を動かす。

そして16時30分。日が傾きはじめた頃、さっきまで荒野だった場所に、ずっと視界の開けた平野が現れた。4,500坪の原野は、きれいさっぱり草が刈られ、まるで最初からそうであったかのような顔をしてそこにあった。その光景を目の当たりにしたO/Sさんは、しばらく言葉を失い、ただ圃場を見渡しておられた。

「数日かかる」と思っていた場所が、「一日で」「楽しげに」終わってしまった。その光景は、説明よりも雄弁だったと思う。

楽農人にとって、これは特別な偉業ではない。今日もどこかに荒れた土地があり、声がかかれば、また機械を積んで出かけていく。それは仕事であり、遊びであり、放浪でもある。

そして、農を守り、耕すことが日本の未来を支える――そんな思いを胸に、楽農人の放浪は今日も続く。

『地獄めぐり』を読んで

山本健治著『地獄めぐり』は、仏教的な地獄の世界をたどりながら、人間の生き方や心の在り方を深く考えさせる作品である。本書に描かれる地獄は、単なる恐ろしい世界としての側面だけでなく、人間の行いや心がそのまま映し出された鏡のような場所として表現されている点が非常に印象的であった。このことは、私たちの日常生活と地獄の世界が決して切り離されたものではなく、密接に結びついていることを強く感じさせた。

作中では、地獄に落ちる原因として「人の苦しみは、他人によって与えられるのではなく、自らの行いによって生まれる」という考え方が繰り返し示されている。例えば「悪業を積み重ねた者は、自らの心に地獄を築いてしまう」という表現からは、自分の言動や思考が未来の苦しみを形作っているという厳粛な真実が伝わってくる。この考えは、死後の罰としての地獄観を超えて、生きている間に自分の心がどう変化し、どう苦しみを生み出しているのかを深く自覚することの重要性を教えている。

私自身もこの部分を読み、日々の言動が周囲や自分自身にどのように影響を与えているのか、改めて振り返らざるを得なかった。

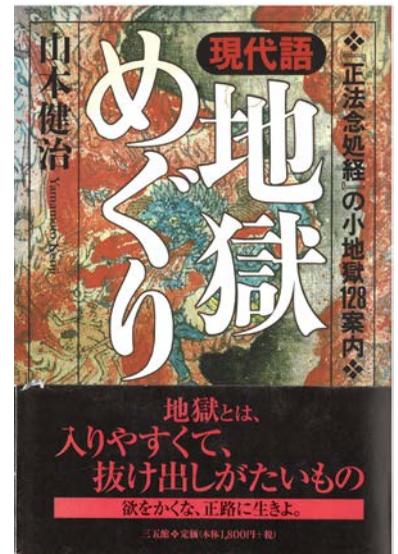
また本書では、地獄の責め苦が非常に細かく、そして鮮明に描写されているが、それらの描写は単なる恐怖や残酷さの強調だけにとどまらない。たとえば、欲望や怒りにとらわれた者が同じ苦しみを何度も繰り返し受ける描写には、「執着を手放さない限り、苦しみからは逃れられない」という深いメッセージが込められている。このことから、私たちは過去の後悔や怒り、嫉妬といった負の感情に縛られている限り、現実の世界でも心の中に小さな地獄を抱え続ける存在なのだと感じた。さらに「**煩惱に囚われた者は、自らの心の牢獄を破ることができない**」という表現は、外部からの罰ではなく、自分自身の心が最大の障壁であることを鋭く指摘している。

特に印象的だったのは、地獄を巡る旅の中で何度も繰り返される「気づき」の重要性である。作中では、苦しみの意味に気づき、自らの罪や過ちを理解した者だけが、救いへの道を見出すことができるとされている。この点について「自分の罪を知ることが、救いへの第一歩である」という記述が示されており、ただ反省するだけでなく、自分自身と真剣に向き合うことの大切さが強調されている。

私はこの考え方に深く共感した。失敗や過ちを否定したり無かったことにしようとするのではなく、きちんと認めることで初めて、次にどう生きるかを真剣に考えることができる。この積み重ねこそが人としての成長につながり、心の地獄からの脱出を可能にするのだと思った。また「過ちを悔い改め、新たな行いを選ぶことで、心の地獄は浄化されていく」という表現からは、絶望の中にも希望と変化の可能性が存在することが力強く伝わってきた。

本書を通して私が強く感じたのは、地獄とは遠く離れた空想の世界ではなく、私たちの日常生活や社会の現実と深く結びついた存在であるということである。作中で描かれる地獄の様子は、「人を思いやらない心」や「自分さえ良ければよいという自己中心的な考え」が生み出す結果の象徴であり、現代社会に生きる私たちにも十分に当てはまるものだと痛感した。知らず知らずのうちに他人を傷つけたり、自分自身を追い込んだりすることで、小さな地獄を自分の周りに作り出しているのかもしれない。実際に作中には「人々の無関心が新たな地獄を生み出す」という一節があり、現代の孤立や分断、格差問題にも通じる警鐘として受け止めた。

この作品を読み終えた今、私は自分の行動や心の持ち方を改めて見直したいと強く思うようになった。感情に流されて怒りや嫉妬に染まりそうになった時、本書に描かれていた地獄の情景を思い返し、一度立ち止まって冷静に考えることができれば、同じ過ちを繰り返さずに済むかもしれない。『地獄めぐり』は、ただ恐ろしい地獄の描写にとどまらず、人間の心の深淵に問いかけを投げかけ、生き方を見つめ直すきっかけを与えてくれる作品であった。これからもこの本で得た学びを胸に、日々の生活を大切にしていきたいと思う。





再生二月号

令和八年二月八日発行 (毎月一回八日発行)

創刊 平成二十八年九月一日

発行人 富吉 袈裟右衛門

		2月						3月					4月								
日		1	8	14	15	15	28	28		8	21	15	15	28		8	18	19	19	26	
曜		日	日	土	日	日	土	土		日	土	日	日	土		水	土	日	日	土	
行事活動名		長目の浜海岸清掃 第37回	岩手県花巻市 早期清掃	博多駅早期清掃 第387回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺 トイレ磨き	戒壇院早期作務 第32回	住吉神社便教会	山本健治先生 お掃除講座 in 博多	長目の浜海岸清掃 第38回	博多駅早期清掃 第388回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺 トイレ磨き	戒壇院早期作務 第33回	住吉神社便教会	長目の浜海岸清掃 第39回	博多駅早期清掃 第389回	冷泉公園トイレ磨き	太宰府観世音寺トイレ磨き	戒壇院早期作務 第34回	住吉神社便教会
場所		鹿児島県薩摩川内市	花巻中央公園	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	観世音寺駐車場	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内	博多区アクシオンBZ	鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	観世音寺駐車場	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内	鹿児島県薩摩川内市	博多駅博多口	博多区冷泉公園内	観世音寺駐車場	太宰府市戒壇院境内	博多区住吉神社内
開始時刻		6時30分	5時55分	6時15分	6時15分	5時00分	6時30分	6時15分	9時00分	6時30分	6時15分	6時15分	5時00分	6時30分	6時15分	6時30分	6時15分	6時15分	5時00分	6時30分	6時15分
運営団体		とんぼろ海掃隊	花巻掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡実践人	とんぼろ海掃隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	とんぼろ海掃隊	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	太宰府作務に学ぶ会	福岡掃除に学ぶ会	



根っ子の友は ありがたき哉

上記行事予定表は、福岡掃除に学ぶ会全体の行事を掲載させていただいています。その他、活動しているお掃除実践もごさいますので、事務局にお問い合わせください。

発行人(編集人) 富吉 袈裟右衛門

◇NPO法人福岡実践人 福岡掃除に学ぶ会

Lineグループ運営: 福岡清爽クラブ

◇福岡仁風読書会

◇NPO法人楽農人 とんぼろ掃除に学ぶ会

〈合同事務局〉 ☎811-2247

福岡県糟屋郡志免町向ヶ丘2丁目4番3号 <仁風庵>

TEL 092-931-8155 FAX 092-931-8120

E-mail fukusoukai@souji.link (掃除)

こしき仁風庵: 鹿児島県薩摩川内市里町里90番地



「再生」に掲載している写真は、富吉が撮影・管理しています。必要な方は事務局までご連絡ください。